

前回までのあらすじ

ふたなりの楽園、ポムベルト王国の魔道士アリア。彼女が調査に向かった洞窟には幻の遺物「淫魔の種」が封印されていた。

必死の抵抗も虚しく、淫魔に魔羅改造を施され彼女は「淫魔アリア」として生まれ変わりを果たした。

アリアと融合した淫魔には高度な擬態能力があり、常人には見分けることが不可能である。

淫魔は精気を欲する。

疼く身体は求めるままに、王宮を目指す。

目的はひとりの王女。

「リリー・ティオラ・ポムベルト」

数年前から行方不明となっている女王に代わり王国を治める小さな花に、堕淫の矛先が向かう……

ミル・アスクレシア

王国の守護騎士長。

"灰塵のミル"の異名を持つ。

その一閃はあらゆる敵を塵に返す。

面倒見が良く、機知に富む。

王女に淡い恋心を抱いている。

リリー・ティオラ・ポムベルト

ポムベルト王国女王代理。

他者の心象風景を視ることができる。

普段は無邪気に振る舞うが、時折見せるオーラは女王の風格とも言える気品を漂わせる。

ミルの恋心に気付いているが、あえて何も言わないでいる。



——大広間に鋭い音が響く。
「王女様！お逃げください！」
「!!」

「あらあら、急にどうしたのかしら?」



「お前は……誰だ！アリアではないな！」

「ひと目で気付くなんて……流石は『灰塵のミル』……
……と言ったところかしら?」

突然のことに王女リリーは戸惑い、声が出てこない。

「アイツはそんな顔で嗤ったりしない:!!
答えろ!アリアをどこ:へ:~::~ぐツ!」



身体が:動かない:!!

「:~::~本当は王女サマだけが目的だったんだけど:..
アナタ、やっぱりいい身体してるわね:~::~」

「アナタはアトでじっくりお相手するわ……フフッ」

「この空間は既にワタシの結界が覆っているの…
『食事』のジャマをされてはたまらないから」



「……この姿もなかなか疲れるのよね」

そう呟くと、アリアの姿が急激に変化する。

王女と騎士を喰らい尽くすために。

「ハアア……アハハ……ツ・カ・マ・エ・タ……♡
なアんで美味しそうな……たまらないわ……」

「や……いや……っ……助けて……ミル……!」



「リリー……王女……さま……ッ」

「あの緊縛魔法でも喋れるのね……ますます気に入ったわ……
安心なさい……すぐに『いっしょ』になれるから……♡」

そう言うと、淫魔アリアは自らの「しっぽ」を
王女の胸へと押し当てた。

「それじゃあ…仲の良いふたりに……プレゼントをあげるわね」



ビクン、と巨体が打ち震える。

「ハア……ウウウウツ……おおっ……産まれ……るっ……♥」

「ウオオ……ッ♡」

魔力が強制的に注入される。
淫魔アリアの体内で醸成された「淫魔の種」は……



さらに進化し、強制的に「開花」できるようにになっていた。
植えられたその時点で「ムスメ」の契りを交わすのだ。

「出……る……ウ……♡」

放精、そして放卵。



「ヴ♥オ♥オ♥漏れ…るウ♥
さア…アナタの中身を全て頂戴…♥」

「ひッ…あ…ア…なに…これ…」

取り出された輝き。待ちに待ったソレを指でなぞる。

「あ…ああッ……か…はッ……」

「どう…？触れただけで全て弾け飛んでしまいそう…でしょ？」



「王国の血筋…やはり極上モノね……」

「や…め……」

「やめてあげない♥いただきます♥」

唇が触れる。激しく仰け反り、身体が跳ねる。

「ツ!!」
快樂が全身に広がる。許容範囲の、遥か彼方へ。



「ああア……この……味……ツ……♡
根こそぎ奪って……与えてあげる……
新しいアナタに……♡」

「全て……ッ……吸い出す……♡んぐ……んむウ……♡」

膨大な量の精気。王国の勃興から紡がれたソレを
味わい尽くす。



アリアを取り込み、ほぼ無尽となった精気容量で容赦なく。
乾いた淫魔のカラダが、潤うと同時に光が溢れてゆく。

「それじゃ……アナタの「終わり」を始めましょう♡」

触手ペニスが射精する。全身に熱が広がっていく。
取り出した魂の核に、黄ばんだ欲望がぶつけられる。
王女は気絶することも許されず、ただ意識の底に侵入され、
押し流されるまま身体を震えさせることしかできなかった。



どぷ。いぷ。ぼぷ。びゆる。びゅ。

「ウフ…頃合い…ね…♥」

その瞬間、最奥への侵入。



魂はヒトならざる「モノ」へ魔羅転生する。

「ウウヴッ…まだまだ射精…る…♡オ♡オ♡」
魂は黄濁した特製の淫魔精液で満たされる。
侵入したモノの「苗床」となり、芽吹きを促すために。



精気の殆どを吸い尽くし、淫魔エリアは満足気に言う。

「準備はこのくらい…ね♡さあ、アナタの出番よ…♡」

「芽吹き」が始まった。



触手が「器」を目掛けて飛び掛かり、胸から全身に這いずり回る……魔羅転生の始まりである。

眩い光が周囲を照らす。

王女の肢体が一際大きく跳ね、小さなペニスから射精する。
器の自我の残滓を一滴残らず吐き出すため。



「魔羅転生はこれで完了……ゴチソウサマ……♡」

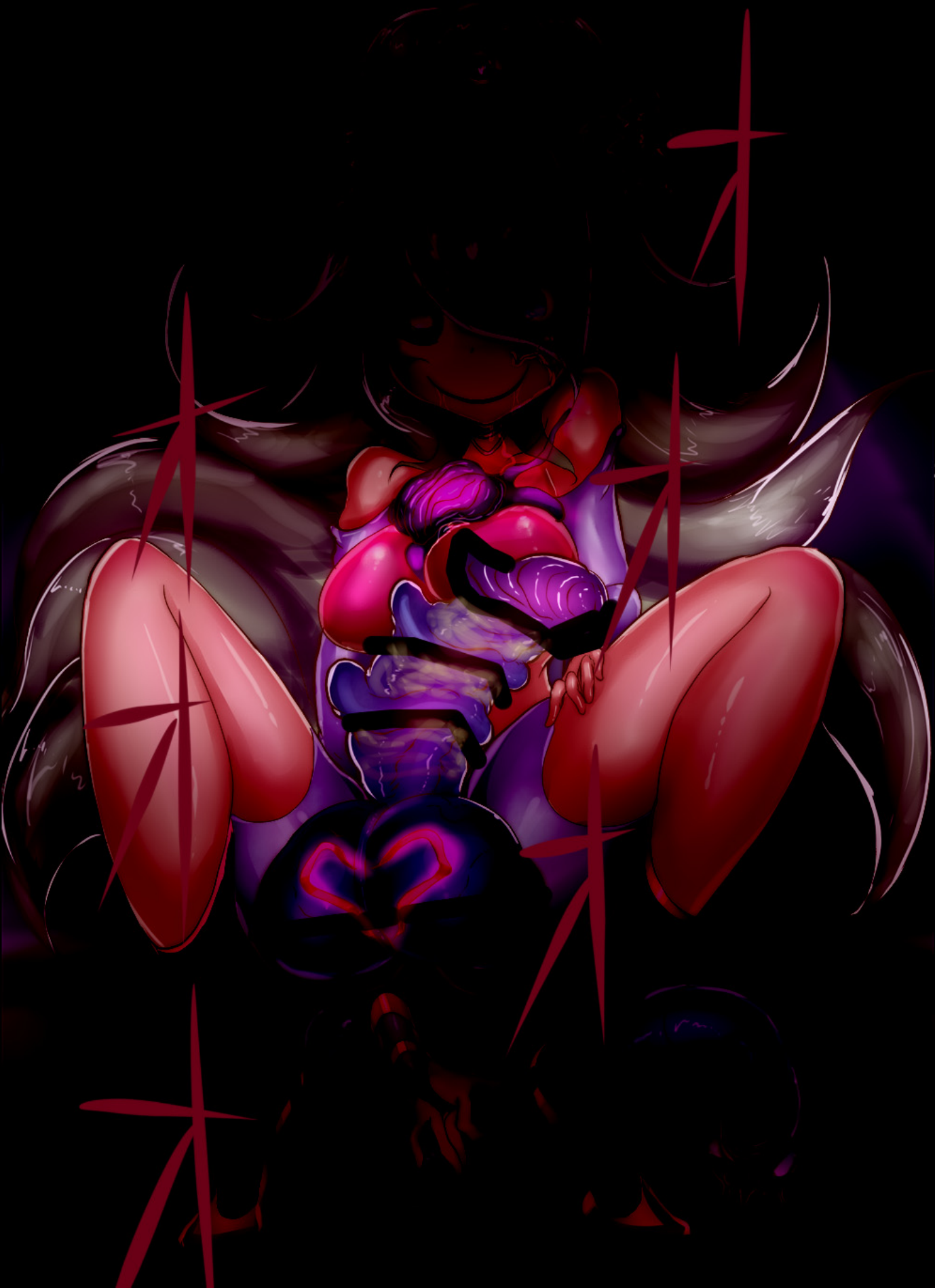
王女は声にならない叫びと共に、闇に包まれた。

「それ」は闇の中から姿を現した。

肥大化したペニスは異形を成し、小刻みに震えている。

感触を確かめるかのように、小さな手は撫で回す。そして…

——クスクス、と静かに嗤った。



「……ハア……アハハ……クスクス……」

ミルの背筋がゾクリと震える。同じ。なのに「違う」声。